

# エスニック・セグレーション研究に関する覚え書き

## —日本での実証研究に向けて—

福本 拓\*

Taku FUKUMOTO

A Brief Note on Ethnic Segregation Studies: Implications for Empirical Research on Japan

### I はじめに

セグレーション (邦語では、「すみわけ (住み分け, 棲み分け)」や「凝離」と訳出される) とは, 主として都市域における社会分化の過程とその過程の結果として生じる空間的パターンの双方を指す (Jackson 2000)。より具体的には, 特定の社会集団が都市内で他の社会集団と異なる形で分布している状況をいい, 中でもエスニック・セグレーション (アメリカの文脈では人種セグレーションに焦点化されることが多い) は, エスニシティに由来する居住の地理的な分離を意味し, 往々にして孤立・差別・反感などを伴うとされる (Kaplan and Holloway 1998)。こうした捉え方に基づけば, セグレーションは複数の社会集団の生成・分布に関わっているといえるが, 単独の集団人口にみられる明瞭な空間的集中 concentration や局所的偏在 overrepresentation あるいは集住 clustering をセグレーションの側面に位置づけることもある<sup>1)</sup> (Brown and Chung 2006)。ここでは差し当たり, セグレーションを, 何らかの社会集団人口の他集団と比較した場合, あるいは単独の場合での空間的に偏った分布と捉えし, そのうちエスニシティに関わるものをエスニック・セグレーションと位置づけることにしたい。

都市におけるエスニック・セグレーションは, これまで欧米を中心に多くの関心を集めてきた。セグレーションが形成される諸要因は, 労働市場や住宅市場の状況, 移民・エスニック集団の社会経済的地位, 移民政策, 差別の程度など非常に多岐に亘る。また, セグレーションは社会-空間分化の一形態として捉えると都市研究の領域に属するが, その一方で, エスニック集団の移住や都市居住という点に着目すれば, 移民・エスニック研究の範疇にも含まれる。従って, これら双方の研究関心が向けら

れてきたことも, この現象をめぐる数多くの議論が展開されてきた一因だといえよう。

日本でも, セグレーションに関わるトピックについては, 都市地理学・都市社会学のテキストでも空間分化の一例として必ずといってよいほど言及されている。しかしながら, 日本のような移民・エスニック集団の人口割合が相対的に小さい地域では, (所得・社会階層と比べ) エスニシティに関わるセグレーションの動向を扱った研究は乏しい。

片や欧米・オセアニアでは, 政策的・社会的関心も高く, 膨大な理論・実証研究の蓄積をベースに, セグレーションに関わる社会問題やエスニック集団の適応の諸相など, 研究の意義付けと関わる前提については半ば所与のものとして共有されている。実際, van Kempen and Ozuekren (1998), Ozuekren and van Kempen (2002), Maloutas (2012) などの包括的なレビューでも, セグレーションに関連する要因・主体が網羅される一方で, なぜセグレーションが研究される必要があるかという点は必ずしも十分には説明されていない<sup>2)</sup>。

従って, こうしたプリミティブな問いに関わる研究動向を整理しておくことは, 日本を含めこれまでセグレーション研究が不活発であった地域での取り組みを進める上で, 一定の意義が認められよう。特に邦文でのセグレーションの説明は, 欧米の主要理論のいずれかに依拠して断片的に行われることが多かった。そのため, 網羅的な既存研究のレビューというよりも, まずは所与とされている前提にある理論的背景の概要を把握することが有効だと考える。

そこで本稿では, セグレーション研究の意義付けに関わる4つの基本的な側面, すなわち, ①セグレーションはなぜ生じるのか, ②セグレーションの変化は何を意味するのか, ③セグレーション

\* 宮崎産業経営大学法学部

の形態は(国家・地域ごとに)どのように異なるのか、④セグリゲーションは何をもたらすのかについて、主たる着眼点を概括的に検討したい。ただし、その際、主要な理論が形成されてきた歴史的な背景、とりわけ人口移動や時代ごとの社会変動との関係に留意する<sup>3)</sup>。

## II セグリゲーションの表出に関する理論 —アメリカの事例—

セグリゲーションに関する研究は、欧米・オセアニアの中でも特に北米、なかんずくアメリカの都市を事例としたものが最も蓄積が厚く、また、この空間的現象を捉えるための数多くの理論的基盤も提供してきた。本章では、セグリゲーションの空間的形態の表出について、時代ごとに隆盛し、現在も多くの研究で参照される4つの分析枠組みに焦点を当て、これらの特徴と含意について順次検討していく。

### 1) シカゴ学派社会学

多くの研究者が同意するように、セグリゲーション研究の嚆矢がシカゴ学派社会学の都市生態学にあることは疑いない。その特徴は、都市における社会的秩序や空間分化の生成を、社会集団間の競争の「自然な」結果として表出と考えるところにある。たとえば、社会集団間の経済的地位の差異は、よりよい場所をめぐる競争を介し、地代の負担能力で序列化された居住地の分化をもたらすとされる(ノックス・ピンチ 2005; Gottdiener and Budd 2005: 2)。もとより様々な活動が展開し分業が進む近代都市では、より良い地点をめぐる諸種の生業やコミュニティの争いが土地利用の分化を生じさせるという意味で、地価にはこれらの活動や社会集団の(ある時点での)秩序が反映されるとみなされる(マッケンジー 1972: 74-75)。新たに到来した移民の場合は、最も地代の負担能力が低い、次第に都市の分業体系に編入されるとともに、社会組織の解体を経験することになる(松本 2011)。シカゴ学派社会学のモノグラフが焦点を当てたのが、この編入や解体がローカル・スケールで生じるプロセスにあった。空間分化という点でいえば、つまるところ、分業に伴う職業階層の細分化や特徴的な社会・文化を有する集団の集住による分化が生じることで、都市にはそれぞれの内部で社会経済的ないし文化的特徴を共有する地域が現出すると考えられた。

また、シカゴ学派社会学では、人口移動が都市空

間の分化のあり様を生じさせる動的な過程にも焦点が当てられてきた<sup>4)</sup>。その代表がパーゼスの同心円構造モデルであり、インナーシティへの継続的な人口流入が既存の社会集団の転出の圧力となり、外方へ玉突き的に居住地移動が生じる結果、都市の空間的拡大と空間分化が相同的に進むという理論が導出された(パーゼス 1972)。もちろん、ここでいう継続的な人口流入は、(当時のシカゴを筆頭に)工業化が進むアメリカ大都市での急速な移住者の増大という具体的背景の下で想定されたものである。

このようなシカゴ学派社会学の理論的潮流は、セグリゲーション研究に少なくとも次の3つの典型的な研究アプローチを生み出した点で注目される。第1に、内部で似通った地域への細分化は、後に隆盛する因子生態分析に基づく研究の礎ともなった。多くの実証研究を通じ、エスニック集団のセグリゲーションが居住分化の一つに位置付けられ(森川 1975)、クラスター状の分布傾向が広範な事例にみられることもよく知られている。第2に、都市内の社会集団の空間的付置に社会関係が反映されるという想定をふまえ、セグリゲーションの程度を計測する研究<sup>5)</sup>が盛んに行われた。もとより都市生態学には、人種偏見といった社会心理学的要因の程度、すなわちパークの用語を借りれば社会的距離の大きさがセグリゲーションの一因になるという見立ても存在する。それゆえ、セグリゲーションの把握によって、居住の分離を促す社会的要因の存在を間接的に看取しようと考えられ<sup>6)</sup>、多くの研究が蓄積された。第3は、第2の点とも関わるが、空間的同化論に代表される、居住地の分散を社会経済的あるいは支配的な社会秩序への同化の反映とみなす分析枠組みである。なおこの研究観点については、同化・適応との関係で、次章にて言及する。

### 2) マルクス主義地理学

以上のアプローチは、現在でもセグリゲーション研究において一定の影響力をもち続けているが、同時に多数の批判の対象にもなってきた。特にマルクス主義的都市論に端を発する理論・実証研究は、シカゴ学派都市社会学の理論的前提のうち、特にセグリゲーションの現出を「自然な」過程の結果とみなす部分について痛烈な批判を浴びせてきた。シカゴ学派社会学とは異なり、マルクス主義的な空間の捉え方においては、居住分化は何よりも資本主義による空間編成の結果として生じることが重要視される。

その旗手の一人であるハーヴェイは、付け値地代論をベースに都市における土地利用の分化の説明を

試みた。地代負担力と居住地の関係という点に限れば、シカゴ学派社会学と全く異なっているわけではないが、しかしハーヴェイによる説明枠組みの最大の特徴は、セグリゲーションの形成要因を資本主義における剰余価値の不平等な分配にみている点にある。すなわち、低所得者層は付け値地代競争によって居住地選択の余地が最小となるために、(準)独占的な家主に直面せざるをえない(ハーヴェイ 1980: 224-5)。この際、家主は超過利潤を最大化することを試みるので、低所得者層は支出の増加を余儀なくされることになり、結果として(高所得者層に比して)より多くの消費者余剰の移転が生じる。特に低所得者層の居住地がインナーシティに集中する場合には、高い賃貸料のゆえに空間の細分化を伴うことになり、これが過密を生じさせる(ハーヴェイ 1991: 97)。さらに、低所得者層の賃貸料負担には上限があるために、家主が超過利潤を維持しようとする場合には、補修を減らすといった形で投資を減少させ(ハーヴェイ 1991: 96)、居住環境のさらなる悪化を招来したり、投資の完全な放棄によって再開発の契機を生み出すことになる。こうした説明図式が妥当であるならば、特に社会階層に基づくセグリゲーションは資本主義下の地代システムを通じた搾取—被搾取関係の必然的帰結としてしか理解されえない。

またハーヴェイは、居住分化に関して、郊外への中間所得層の集中についても同様の観点から把握している。上記のようなインナーシティの居住環境の悪化は、中間所得層の転出促進の一因となると同時に、郊外の新興住宅の購入以外に選択肢の乏しい中間所得者層もまた(低所得者層と同様に)消費者余剰の減少を経験する(ハーヴェイ 1980: 229)。こうした郊外住宅地自体、行政・金融機関・デベロッパー等による諸種の規制や(インナーシティから移転された消費者余剰の)再投資によって現出したものであるという意味でも、「資本主義的生産様式のきわめて特殊な創造物」(ハーヴェイ 1991: 165)とみなされる<sup>7)</sup>。端的には、セグリゲーションも居住分化も、資本主義的空間編成に本質的な現象として説明されると考えられる(Harris 1984: 39)。

ハーヴェイに代表されるセグリゲーションの存在を批判的に捉える観点<sup>8)</sup>には、1960～70年代の「都市の危機」という時代的背景も色濃く反映されていることも見逃せない。すなわち、フォーディズムを基調とする蓄積体制の転換とともに、都市のとりわけインナーシティにおける雇用喪失が顕著になり、さらにアフリカ系住民に関しては住宅差別の存在も

影響した結果、いわゆるゲッターには失業をはじめとする諸種の社会問題が集積した。しばしばアンダークラス論と絡んでハイパーゲッター-hyper-ghettoとも形容される状況は(Massey and Denton 1993; ウィルソン 1999)、そこからの空間的・社会的移動が不可能なほど孤立した強固なセグリゲーションの存在を示唆する。キング牧師の著名な演説でも、奴隷解放後100年が経った時点でさえ「黒人の生活は不幸にも依然として差別の連鎖とセグリゲーションの束縛のくびきを受けている」<sup>9)</sup>ことが強調されるなど、とりわけアフリカ系をめぐるセグリゲーションについては極めて解決の必要性が高い問題だと認識されていた。

しかしながら、しばしば指摘されてきたことであるが、マルクス主義の都市編成理論では、階級に応じたセグリゲーションの形成過程がクリアに例証されている反面、諸種の社会集団のうちエスニック集団の居住分化がなぜ生じるのかという点は十分検討されてこなかった。これは、換言すれば、セグリゲーションに関わる(エスニック集団に特有の)社会的要因が説明枠組みから捨棄されていることを意味する。また、エスニック・セグリゲーションの背景にある、国際人口移動との関係も看過されがちである点も指摘できる。

### 3) 分業とセグリゲーション

ハーヴェイらの説明図式が、主として住宅、つまりは消費や労働力再生産の領域に焦点を当てたのに対し、生産の領域における分業からセグリゲーションを問う研究も、一つのまとまった研究観点を呈示してきたといえる。中でも社会階層ごとの居住分化に関するスコット(1996)の説明枠組みは、分業に伴う事業所間取引の費用縮減の志向から生じる産業集積と、労働力プールの近接性との連関関係という、生産と労働の両面を視野に入れたものとして注目される。すなわち、特にフレキシブルかつ低賃金の労働力が求められる中・小規模の産業集積は、労働供給が少なければ賃金上昇の圧力にさらされるため、都心部近郊の人口集中地域に立地する。一方、非熟練の労働者は、通勤費用の支出抑制と離職リスクの高さから、こうした集積に近接して居住する傾向を示し、これら生産・労働の両面の関係が居住分化を促すと捉えられる。そしてスコット(1996)は、エスニック集住地区もこうした居住分化の過程で生じるものと想定し、単に労働需要の短期的な変動が大きい局地労働市場への参入にとどまらず、集住地区内の相互扶助的ネットワークが不安定な就業下での生

活維持の条件となることで、明瞭な集住地区が就業地に近接して現出すると想定している。

エスニック集団のセグリゲーションに分業の観点からアプローチする試みは、フレキシブルな蓄積体制という現代的状況に主眼のある研究だけでなく、歴史地理的な側面に着目する分析でも関心が持たれている。たとえばSchleuder (1989) は、熟練・非熟練工程の分業が顕著化した20世紀初頭の事例をもとに、非熟練工程におけるエスニック集団の集中が、所得に応じて分化された住宅供給と関連することで、エスニック・セグリゲーションが現出する過程を描出している。同時期には、Massey and Denton (1993) も指摘するように、ヨーロッパ系のみならず国内のアフリカ系移住者もストライキ破りとして生産工程に導入された結果、既存の労働者との軋轢が増幅し、住宅市場においても差別が顕在化したことでセグリゲーションが強化された部分もあった。これらの事例が示唆する、分業が社会的側面と関わりつつエスニック集団の居住分化に帰結するという因果関係は、スコットによる「アメリカのメトロポリスにおけるエスニシティは本来的に、局地労働市場の圧力やニーズ次第の産物」(スコット 1996: 261, 強調部は筆者)であるという主張とも符合する。

分業に焦点を当てたセグリゲーション研究の強みは、それが現代の大都市における移民労働者の継続的増加という人口移動との関連も射程に含んでいる点にある。サッセン(1992)によれば、産業集積の存在、工程の標準化による垂直統合と生産拠点の移転、そして新たな集積における低賃金労働力のニーズの出現という一連のプロセスは、大都市において苦汗工場sweatshopを存続させ、社会的ネットワークを通じた移住者の流入と集住を招来するとされる。さらにサッセン(1992)は、海外からの移住者の労働市場への参入は、(彼ら・彼女らが労働者になるまでに要した)再生産コストの縮減という側面も有している点にも注意を促す。つまるところ、セグリゲーションの形成要因として、労働費を含む生産コストの縮減がもたらす経済地理への着目が不可欠であることが示唆されているといえよう。

このほか、サッセン(1992)やMollenkopf and Castells eds. (1991) の議論では、製造業の変容のみならず、グローバルに展開する経済活動の統括拠点や高所得階層の存在により、サービス業においても低賃金労働ニーズが増大し、結果として中間所得層が減少する社会的分極化social polarizationという現象にも焦点が当てられている。いわゆる「世界都市」におけるこうした社会経済的変容は、たとえばジェント

リフィケーションを通じて高所得層の空間的集中に寄与すると推測されており<sup>10)</sup>、セグリゲーションの現代的な諸相を検討する上でも注目される。

ただし一方で、以上に挙げた説明枠組みでは、次章で述べるような、エスニック集団の自営業者の集中を通じた社会経済的上昇などが欠落しがちであるという問題も挙げられる。換言すれば、集住地区を形成するような移民・エスニック集団は、基本的に低賃金労働者にとどまる存在として位置づけられている。また、世界都市の議論では高所得階層の移民の存在も言及されているが、彼ら・彼女らと居住分化との関係について、必ずしも十分な実証研究が進んでいないことも課題として挙げられよう。

#### 4) エスノバークと双方向的な人口移動

4つ目として注目したいのは、上述の3つほど「理論」として成熟しているわけではないが、近年の大都市郊外におけるエスニック集団の増加に注目した研究、とりわけエスノバークethnoburbに関する分析枠組みである。

この研究の嚆矢はLi (1998, 2009) であり、ロサンゼルスの中系住民を事例に、郊外に現出した新たなタイプのエスニック集住地区を指し示す目的で用いられたのが最初である。次章でも言及するように、社会経済的上昇を果たすなどしたエスニック集団が郊外に移動することは、アメリカ都市では比較的広範にみられた。しかしLiの着眼点の特徴は、インナーシティにおける集住地区の単なる拡大や移転ではなく、グローバリゼーションとの関係も含めてこの現象を捉えようとした点にある。

アメリカでは、1990年代以降、投資移民の積極的移入を図った移民政策へと転換した結果、低賃金労働者のみならず、出身国でも社会経済的地位が高く一定の資産を有する人々の移住が急増していく。特にアジア系について、後者の多くは、既存のエスニック集団の移動が見られ始めた郊外へと多く集中し、従来一般的であった小売・サービス業以外にも様々な分野でビジネスを起業した。一方、前者の人的資源に乏しい移民は、ホスト社会における低賃金労働力としてだけでなく、こうしたエスニック・ビジネスにおける労働力や需要の供給源という役割を果たしていることも注目される。

Liが指摘するように、アジア系の新規移民による郊外の集住地区は、ある種の「意図的な行為」(Li 2009: 29)の結果として生じている部分がある。というのは、ビジネスの機会や良好な居住環境に恵まれた地区に、移住の需要を見込んだ同一エスニック集

団のデベロッパーによる開発が進み、そこに出身国の金融機関の資金提供もあって、居住・就業の空間的集中が顕著になったというプロセスがみられるからである (Light 2006)。従って、エスノバープに関する理論は、先述の3つの観点で欠落している、(移住者自身の持ち込むものを含めた)資本が人口移動と集住地区形成に果たす不可欠な役割を示唆している点で意義がある。

さらにLiは、エスノバープで生じたビジネスの一部が、出身国を含め国境を越えて展開している点にも注目する。この意味で、エスノバープは、アメリカと各国との間のグローバルな経済的繋がりという背景の下、国際的な資本・商品流動の結節点という機能も果たしている。さらに、こうしたビジネスに従事する社会経済的地位の高い移民は、しばしば双方向的な移動を行っているという、特徴的な人口移動形態も見受けられると指摘されている。従って、エスノバープをめぐる諸状況への着目は、グローバリゼーション下で展開する、人口・資本の国境を越えた移動と集住地区との連関性という新たな研究の観点を切り開いたと評価できよう。

本章で述べた4つの分析観点ないし説明枠組みは、セグレーションの把握とその位置づけについて、関連する諸要因を包括した精緻な分析だけでなく、時代ごと、またスケールごとに異なる経済的・社会的要因から検討する必要性を示唆している。これら4つの分析観点に即していえば、①シカゴ学派社会学は近代都市の工業化過程と都市への国際人口移動、②マルクス主義地理学についてはフォーディズム蓄積体制の危機と人種問題、③分業に関わる生産の地理学的研究では産業集積とフレキシブルな蓄積体制、④エスノバープに関しては双方向的な国際人口移動とグローバリゼーションといった社会空間の変動が、セグレーションや集住地区の含意を探る上でそれぞれ重要性を有している。従って、アメリカ以外の事例研究にとっても、こうした広範なコンテキストへの着目が求められるといえよう。

### III セグレーションと社会的・空間的モビリティー同化と適応をめぐる一

続いて本章では、セグレーションの変化という側面に関し、主として社会階層間の(上方への)移動、すなわち社会的モビリティとの関係からアプローチする観点について俯瞰する。特にアメリカの場合、移民・エスニック集団の社会的モビリティには同化・

適応との関連から多大な関心が向けられ、その枠内でセグレーションの変化やその背景にある居住地移動といった空間的モビリティの動向にも焦点が当てられてきた。

こうした研究の中でも、最も広範な理論的基盤を提供してきたのが、空間的同化論spatial assimilation theoryである。同化<sup>11)</sup>という用語・現象自体、シカゴ学派社会学における研究の要諦の一つを成し、移民・エスニック集団が居住の長期化や第二世代の増加を経て、次第に社会階層の上昇を果たす過程や、その際に生じる生活様式や文化・言語の変容に多大な関心が向けられた。空間的側面との関わりについていえば、集住地区の存在はエスニック集団内の社会関係や主流社会と異なる文化の存続に寄与する一方で、職業階層の上昇はより良い居住環境を求めた(主として郊外への)居住地分散という結果として現出すると捉えられる。これは、例えばパークが示唆するように、社会階層や所得ならびにエスニシティの面で分化した都市空間において、「職業〔の地位〕の変更は…地理的位置の変更に現れる」(Park 1926: 5)ことから生じる。従って空間的同化論の骨子は、言語・文化や社会経済的地位の面でホスト社会に近似するほどセグレーションが弱化するという、社会的・空間的モビリティの間の因果関係を想定している点にある(Massey 1985)。

このような、集住地区の空間的変容を社会的・空間的モビリティの反映とみなす枠組みは、前章で言及した社会的距離・空間的距離の連関性と同様、セグレーションの定量的分析においても研究意義に関わる理由付けの一つとして広範に参照されてきた。このほか、先述した生産の地理からセグレーションを捉える研究でも、低賃金の移民の流入と集住地区の形成が継起的に生じる要因として、従前にその位置を占めたエスニック集団の社会経済的上昇と居住地の分散という図式が呈示されている(スコット 1996: 261)。もちろん、アメリカ都市ではアフリカ系の事例に代表されるように、差別やフィルタリング過程<sup>12)</sup>が住宅市場における人種ごとの分断を作り出し、結果として社会経済的地位の上昇がセグレーションの弱화에結実しない場合もある。ただし、空間的同化論においてこの点は十分認識されており(Massey and Denton 1985)、人種ごとの階層化は追加的に考慮すべき要因に位置づけられているともいえる。

一方で、空間的同化論の骨子である社会的モビリティと同化の連関性という理論的前提に対し、特に1960年代以降に増加した移民・エスニック集団を対

象とした事例研究から、数多くの批判も展開されてきた。もとより、空間的同化論の背景にある（シカゴ学派社会学を嚆矢とする）同化プロセスに関する理論は、19世紀末～20世紀初頭のアメリカにおけるヨーロッパ系移民の経験に由来する部分が多い。新たな移民の同化・適応の諸相に着目した研究は、主として社会・文化的側面に分析の主眼があるものの、いくつかについては居住分化や集住地区といった空間的側面への示唆も（空間的同化論とは異なった形で）得られる。

一つは、「分節された同化論segmented assimilation theory」に基づくもので、政策やコミュニティとの関係に基づく移民・エスニック集団の編入様式の理論化において、インナーシティの社会環境という部分で副次的にセグリゲーションとの関係が言及されている。Zhou (1997) によれば、セグリゲーションや諸種の社会的問題の集中によって周縁化されたインナーシティでは、しばしば主流社会の価値観に対抗的なサブカルチャーが生成・共有されることで、社会的な上昇移動の契機が失われる状況が存在する。そして、インナーシティに位置することが多い移民・エスニック集団の集住地区では、第二世代の若者の一部がこうしたサブカルチャーに「下降同化downward assimilation」（ポルテス・ルンバウト 2014: 121）することで、社会的モビリティの実現可能性が減じるという。こうした状況は、換言すれば、人種差別といった構造的要因だけでなく、社会階層の上昇自体を阻害する要因がセグリゲーションと関連して生じうることを示している。

いま一つは、同様に居住分化を主題としたものではないが、エスニック経済<sup>13)</sup>の生成と社会的モビリティに関する議論の中で、空間的側面への含意が存在することが注目される。この議論では、端的には社会的モビリティを空間的モビリティの与件と考える空間的同化論への反証として、自営業者層への参入によってホスト社会への同化によらずとも社会経済的地位の上昇を達成する経路が焦点化されてきた (Portes and Manning 2008)。エスニック経済に関する既往研究が指摘する通り (Waldinger et al. 1990; Portes 1995)、自営業者層の出現にはエスニック集団内の社会関係資本や（社会的ネットワークを通じた）労働力供給が密接に関わっている。さらに、エスニック経済に関する特徴として、自営業者の空間的集中が析出されるとともに、集住地区が労働力・顧客の提供やエスニック・ネットワーク生成などで重要な機能を果たすと考えられてきた (Kaplan 1998; Light and Gold 2000)。このような、明瞭な集住地区

の存在が社会的モビリティを高めて主流社会への適応に至るという図式は、アメリカの場合には中国系・韓国系などのアジア系のほかキューバ系移民によく適合するとされ、エスニック経済の盛衰をめぐる諸条件を含めて多数の事例研究が存在する。

以上のように、セグリゲーションの変化の背景を捉える上では、社会的モビリティや集住地区のおかれた社会的環境のほか、諸種の差別の存在、さらには自営業者を含む経済的側面を視野に入れる必要があるといえよう。それと同時に、前章と同様、変化に関する主要な理論にもまた、主としてアメリカ都市の経験が色濃く反映されていることに注意する必要がある。特に、上述した理論の構築過程において、インナーシティと郊外との明瞭な地域的特徴の差異の存在、アフリカ系をめぐる強固なセグリゲーションの存続、あるいは時代ごとに異なる移民流入の状況などが影響している点は見逃すべきでない。

#### IV セグリゲーションの国際比較

前章までで示したように、アメリカにおいてセグリゲーションに関する議論が数多く蓄積されてきた背景には、19世紀末以来の都市発展と移民増加の相同期間の進行や、1960年代のエスニック集団と都市問題の関わりなど、都市研究にとってセグリゲーションの持つ意味合いが非常に大きかったことが影響している。それゆえ、得られた分析結果や理論の有用性については、アメリカ都市に特有の諸状況を勘案した上で理解される必要がある。一方で国際人口移動の量的増大が顕著になるにつれ、（西欧を中心とする）ヨーロッパやオセアニアといったアメリカ以外の都市でもセグリゲーションの諸形態やその含意に対する関心も高まってきた。もちろん、これらの地域ではアメリカと比べて移民・エスニック集団の割合は相対的に小さく、関連統計の集計基準やスケールにも差異がある。このことは、たとえば定量的な研究において国際比較・都市間比較を念頭においた分析手法の練成にも寄与した (Poulsen et al. 2001)。それとともに、多数の事例研究の蓄積を通じ、セグリゲーションの諸形態を評価する上で、政策・社会制度といったマクロな観点の重要性も示唆されてきた。

たとえばヨーロッパでは、エスニック集団のセグリゲーションの程度は概してアメリカに比べて低いことが知られており (Musterd 2005)、これには住宅政策や社会制度の国ごとの違いが強く影響している

とされる。セグリゲーション現出に果たす住宅市場の役割についていえば、アメリカではもっぱら民間セクターの占める割合が大きいのにに対し、ヨーロッパの場合には公営住宅の供給が多く、また所得の再分配機能も相対的に発達している。つまり、セグリゲーションの度合の相対的な低さを理解する上では、このような福祉国家的な機能への着目が欠かせない (van der Wusten and Musterd 1998; van Kempen and Ozuekren 1998)。

さらに、政策とセグリゲーションの関係については、移民の社会統合に関する理念の違い、とりわけいくつかの国では多文化主義が採用されていることも重要なポイントである。多文化主義においては、移民・エスニック集団に特徴的な文化的要素は護られるべき価値と考えられるため、マイノリティの文化やアイデンティティの維持に寄与しうる集住地区の存在は、社会経済的側面での同化によって必ずしも解消すべきものとはみなされない (Johnston et al. 2002)。このような住宅政策や社会統合政策の国ごとの特性は、セグリゲーションの評価にとって考慮すべきマクロな要因の代表的なものとして挙げられる (Musterd and Ostendorf 1998)。

もちろん、ヨーロッパやオセアニアにおいても、エスニック集団の集住地区が常にポジティブに捉えられてきたわけではない。とりわけヨーロッパの場合、福祉国家的あるいは多文化主義的な政策の下でさえ、集住地区にはしばしば貧困をはじめとする社会問題が集中し、反移民感情やメディアの扇動によってアメリカと同様の「ゲッター化」が進みうるという懸念も生じた (Fortuijn et al. 1998: 367)。ここでアメリカの状況が一つの参照点になった背景には、1960年代以降の時代状況、すなわちアメリカのインナーシティ問題とヨーロッパにおける (ゲストワーカーや旧植民地からの移民といった形で) エスニック集団の存在の顕現化があった。実際、こうした懸念がセグリゲーションに関する実証研究を後押しした部分もある (Peach 1996)。

また、特にヨーロッパの場合には、社会政策との関連からもセグリゲーションへの関心が集まってきた点も特筆できる。特に社会的排除 social exclusion をめぐる議論では、集住地区で現出しがちな (特に第二世代における) 就業機会へのアクセス面での不利や社会参加の欠如が問題視されてきた。こうした傾向は必ずしもヨーロッパに限られたものではないが、脱工業化の進展とともに福祉国家的機能が弱化する中、機会の平等や社会統合の実現の上で大きな障害になると考えられ、諸種の政策的介入が実施さ

れた。その代表例がセグリゲーションの弱化を目指したソーシャル・ミックス政策であり、エスニシティや社会階層の異なる集団同士の近接居住を実現する目的で、都市再開発における多様な住宅提供といった政策が実施されてきた。ただし、こうした施策が有効な解決にはなりえないという主張も多く (Ostendorf et al. 2001; Bolt et al. 2010)、そもそも近接居住が社会階層を横断する関係形成に繋がるという前提を疑問視する指摘もある (森 2016)。いずれにせよ、ここでは社会的モビリティに限らず、社会統合あるいは (エスニシティの境界を越えた) 関係形成のあり様にも焦点が当てられていることが注目される。

以上のように、アメリカ以外、とりわけヨーロッパでのセグリゲーションに関する議論を一瞥すると、移民・エスニック集団の居住分布の把握にとって、移民・社会政策の違いといったマクロな要因、さらには、それと関連した政策的介入やその背景にあるセグリゲーションへの認識等を勘案する必要性が示されているといえる。その一方で、グローバリゼーションに伴う変化、たとえば社会的分極化や新自由主義下での公的セクターの縮小などは、かなり普遍的な影響力を持ってヨーロッパやオセアニアの都市 (特に世界都市と呼ばれるような大都市) における移民流入や都市空間構造の変容を引き起こし、その帰結はセグリゲーションについても及んでいる (Musterd and Ostendorf 1998)。従って、欧米・オセアニア以外の事例研究にとっても、セグリゲーションや集住地区の分析に際し、空間的形態の把握にとどまらず、諸スケールの政策・制度をふまえて、他地域との相違性・相同性といった観点からその含意を位置付けることが肝要だと考えられる。

## V セグリゲーションとコミュニティ

前章までの整理では、主としてセグリゲーションの形成・変容に関わる諸要因に関わる研究観点、換言すれば、何が特徴的な空間的形態を生じさせ、あるいは変化させるのかという側面に焦点を当てた。これに対し本章では、上述の議論でも断片的に触れた、セグリゲーションや集住地区によってもたらされる様々な社会的帰結について概観する。既述の通り、たとえばⅢの社会的モビリティやⅣの社会的排除をめぐる議論では、セグリゲーションに伴う貧困や社会参加の欠如の空間的集中が、累積的に社会階層の上昇機会の機会を阻害することが示されてき

た。本章では、こうした問題に加え、特にセグリゲーションの帰結としての社会編成、具体的にはコミュニティのあり様に焦点を当てたい。というのは、このトピックは、国際人口移動の多様な形態の出現や、近年の先進諸国で顕在化している反移民感情の高まりとも関連しており、その意味でも注目に値すると考えられるからである。

IIの1)で言及したシカゴ学派社会学に端を発する生態学的観点では、都市とコミュニティの関係も主題の一つとして多大な関心が注がれ、都市の発展が親密な関係に基づくコミュニティの形成に寄与するのか、あるいは衰退させるのかといった仮説をめぐって数多くの研究が蓄積されてきた(松本 1995)。広く知られているように、特にインナーシティの遷移地帯と呼ばれる地域では、主流社会とは異質な習慣・道徳観や社会関係に基づくコミュニティが自然的に現出すると想定され、数々のエスノグラフィックな研究が都市での生活経験や社会的分業を通じたコミュニティの変容を描出してきた。エスニック集団の集住地区もまた、こうした「自然」な過程で生じた空間的形態とみなされ、居住地の近接性に基づく特徴的な社会・文化の維持がコミュニティ形成を促進すると捉えられた。

これに対し、マルクス主義地理学の観点に基づけば、資本の空間編成を通じて現出した社会階層によるセグリゲーションは、階級相互間の関係形成の弱さや相互無関心が階級の分断をもたらすとともに、(特に労働者階級の集住する地域において)政治意識の高まりを惹起させると考えられる。しかし、コミュニティを考える場合には、居住分化された個々の地域が有する社会階層ごとの労働力再生産という機能も勘案せねばならない(Harris 1984)。つまりコミュニティとは、分業に応じ、(ホワイトカラーとブルーカラーに代表されるような)異なるタイプの労働力再生産が行われる場所であり、その中での社会関係形成を通じて消費習慣や価値が共有され、結果として社会階層間を移動する機会が減じる(ハーヴェイ 1991: 160)。同様にカステル(1997)も、コミュニティの結束が労働力再生産の基盤となる住宅や公共サービス等の集合的消費への利害関心から生じ、しばしば人種・エスニシティに由来する構造的差別と複合して都市社会運動を生起させることを指摘している。ただし、コミュニティにはこうした資本の空間編成と(集合的消費に関わる)再分配的機能に還元されない、居住の近接性に基づく互酬的な側面も様々な形で残存しており、その代表例としてエスニック集団の集住地区に特有の社会関係が挙げられている

(ハーヴェイ 1980: 374)点には注意したい。

先述した通り、居住分化の主因を資本の空間編成にみるマルクス主義的な研究観点は、コミュニティの形成を「自然」な過程と捉えるシカゴ学派社会学への反駁から生じてきた。しかし実際のところ、集団成員の近接居住が社会集団ごとの関係形成に寄与するという捉え方自体は、両者の間でそれほど大きく異なるわけではない。なおこの点は、IIの3)で触れたスコット(1996)など、生産の地理からセグリゲーションを捉える枠組みでも暗黙裡に共有されている。換言すれば、セグリゲーション現出の要因を生態学的過程あるいは資本主義下の生産・再生産過程のいずれに見出すかにかかわらず、コミュニティの形成にとって居住の近接性が最重要の要因の一つに位置付けられてきたといえる。

居住の近接性と社会関係との連関性の想定は、前節でも言及した社会的排除論やソーシャル・ミックス政策のように、エスニック集団内部あるいは集団内外の社会関係形成に関する実証研究やコミュニティ政策にも受け継がれている。その中で、こうした連関性が実際に見出されるのかについても、多数の実証研究が蓄積されてきた。その代表例の一つが近隣効果neighborhood effectに関する定量的研究で、移民・エスニック集団の集住は実際に関係形成を促進しうるのか、(個人の社会経済的地位だけでは説明できない)上方ないし下方への社会的モビリティをもたらしうるのか、あるいはエスニシティを越えた関係形成が社会経済的な面でのメリットを生じさせるのかといった点が精力的に議論されてきた<sup>14)</sup>(Briggs 2003; Portes and Vickstorm 2011; Vanhoutte and Hooghe 2012; Sturgis et al. 2013)。

このような観点からの分析は、現代の時代状況、すなわち多文化主義へのバックラッシュをはじめとする反移民感情への懸念という状況を勘案すると、ますます重要性を高めていると考えられる。たとえば公的な多文化主義政策を失敗とみなす傾向が強まっているイギリスでは、移民・エスニック集団の文化の維持が孤立につながりうる状況が問題視され、ホスト社会と移民の価値観共有を目指した社会のあり様が模索されている。しばしば社会的結束social cohesionないしコミュニティ結束community cohesionという用語で表現されるような、多様なエスニシティを横断した社会関係形成やその利点<sup>15)</sup>を評価する上でも、現実のセグリゲーションと社会関係形成の関係を検討することには大きな意義がある。

しかし一方で、現代的な国際人口移動の動向に目



を向けると、居住地の近接性と社会関係形成との関係を所与とみなす見方は、現実の移民・エスニック集団をめぐるコミュニティに合致しない部分も生じている。もとより、空間的同化論が想定する集住地区の維持・解体と社会経済的な同化の結びつきについては、居住地の分散が必ずしもエスニシティに基づく社会関係やアイデンティティの弱体化に寄与しないという反証も数多く出されてきた(杉浦2011)。近年は、双方向的な国際人口移動や移住者の社会経済的背景の多様化が、近接居住に基づかないエスニック・コミュニティの存立を可能にする側面も注目されている。一つの理論化の方向として挙げられるのがZelinsky and Lee(1998)のヘテロローカリズムhetero-localism概念であり、通信テクノロジーの発達に時に国境をまたぐ形態のネットワーク形成を促進し、その結果として居住地の偏在に制約されない(しばしばトランスナショナルな性質も持った)コミュニティが現出するとされる。

加えて、居住地をベースとするコミュニティの形成は、居住分化や社会的な側面からのみ説明できるわけではない。この点について、近年、van Ham and Tammaru(2016)のように、セグリゲーションを居住に限定せず、学校・職場や余暇が過ごされる場所といった(時間地理学でいうところの)領域domainに着目し、日常的な移動の蓄積から理解する必要性も示されている。中でも注目されるのは、就業地と居住地との関連性に焦点を当ててセグリゲーションを分析する研究の増加である(Ellis et al. 2004; Wang 2010; Tammaru et al. 2016)。就業地への着目は、単に多様な日常活動からセグリゲーションを捉えることにとどまらない。というのは、IIの3)でも言及したように、就業地それ自体が都市空間における生産をめぐる諸関係から形成されているからである。IIIでも言及したエスニック経済に関していえば、事業所間のリンケージといった産業集積に関連する経済的要因もまた、集住地区の形成を考える上で見逃せない(Zhou 1996)。このような経済地理学的な観点からは、再生産の側面に意識が偏りがちなセグリゲーションとコミュニティの研究に対し、新たな視座を切り拓く可能性を有している。

以上をまとめると、都市におけるセグリゲーションとコミュニティの関係について、居住分化の捉え方の違いはあっても、エスニック集団の社会関係形成にとって居住地の近接性が一つの基盤になるという想定は底流として存在している。実際、現代都市でもこの枠組みが適合する部分は相当程度あると考えられ、多文化主義の転換という時代状況にあって、

社会統合の観点から集住地区の諸相とホスト社会との関係のあり様を探ることも重要な研究課題となっている。一方で、集住地区と社会関係の形成の連関性は、現代に特徴的な国際人口移動の形態からすれば可変的であるほか、再生産のみならず生産をめぐる諸関係によって現出することも念頭に置く必要がある。これらの点をふまえると、セグリゲーションのもたらす社会的帰結について考える上では、就業など居住以外の側面にも着目した実証分析が求められるといえよう。もちろん、その際、集住地区や社会関係形成の背景にある、地域ごとの社会経済的特性や政策といったコンテクストも勘案する必要はあることは言を俟たない。

## VI まとめを代えて —日本での事例研究に向けて—

本稿では、都市におけるエスニック・セグリゲーションをめぐる研究視角について概観し、その形成要因に関する説明枠組みや着目する意義について概観してきた。主として欧米の研究蓄積に鑑みれば、日本のような移民・エスニック集団の人口割合が相対的に小さい地域でも、以下の諸点に着目した研究が成立しうると考える。

### ①人口移動とセグリゲーションとの関係

セグリゲーションと都市空間との関係をどのような理論的立場で捉えるかによらず、その形成・変動を捉える上では時代によって異なる都市と人口移動との関係への着目が欠かせない。この場合の移動には、都市への一方向的な流入のみならず、時に双方向的で国境をまたぐようなものも含まれるし、アメリカにおけるアフリカ系の事例からも看取できるように、国内移動の動向にも注意すべきであろう。また、グローバル化の進展や都市のリストラクチャリングは、移動の頻度や階層の点で人口移動の多様化をもたらしている。近代以降の日本の場合、都市の形成過程で地方・農村からの移動が生起し、特に第二次世界大戦前には植民地からの移住者も多数到来した。一方で、1980年代以降、たとえば世界都市ネットワークの中で大幅な国際人口移動の増加を経験した都市も存在する。従って、都市内のセグリゲーションを、ある一時点のものとしてだけでなく、国際・国内人口移動の歴史的展開と関係から位置づけた分析が、日本の都市および移民・エスニック集団の特徴を議論する上で意義を有するとい

える。

## ②時代によって異なる都市の社会経済的特性

セグリゲーションや集住地区が、都市における社会階層の居住分化とも強く関連していることは疑いない。シカゴ学派社会学についても、資本主義的な空間編成への観点の不足が批判的的となってきたが、それでも居住分化の背景要因の一つとして分業の進展に由来する社会階層の分化は理論の射程に含まれていた。社会的・空間的モビリティの連関性についても、集団ごとの差異だけでなく、雇用の郊外化や社会的分極化といった、時代に依りて生じた都市の空間構造の中で理解されなければならない。マルクス主義地理学が想定する蓄積体制の変化や、世界都市に関する理論などは、この点に関わる重要な理論的枠組みとして位置づけられる。日本でも、社会階層に着目した空間分化の研究は地理学のみならず都市研究の多くの領域において盛んである。しかし、エスニック・セグリゲーションについては手付かずのまま残されているのが現状である。

## ③マクロな政策や社会構造の影響

セグリゲーションの形成や存続には、住宅市場・労働市場に対する政府の介入のほか、移民・エスニック集団の社会統合に関する政治的・社会的認識が影響している。もちろん、こうした政策は不変のものではなく、多文化主義の見直しといった形で、時にドラスティックな転換を経験することもありうる。日本の事例研究に当たっては、単なるアメリカ・ヨーロッパとの差異の強調にとどまらず、セグリゲーションの背景にある政策的・社会構造的な変化の足跡をふまえる必要がある。たとえばFukumoto (2013)でも示したように、在日朝鮮人の場合には持ち家比率が日本人と比べて高いという特徴がある。その一因には、公的住宅への集中が顕著な西・北ヨーロッパとは大きく異なり、第二次大戦後に「外国人」となった彼ら・彼女らが国籍を事由にそうした住宅から排除されてきた経緯があった。日本に特徴的な社会政策・都市政策も見据えたセグリゲーションの検討は、他地域の都市との比較研究にとっても有益だろう。

## ④セグリゲーションとコミュニティ

居住地の近接性がエスニシティを共有する人々の関係形成を促進するという見方が支配的である一方で、近年の国際人口移動の形態の多様化により、必ずしも近接性によらないエスニック・コミュニティも生じている。それゆえ、エスニック集団の社会的ネットワークの実態把握のほか、結束あるいは軋轢

を生じさせる諸条件について、地域の特徴をふまえた分析も求められる。それとともに、③とも関わるが、近年の社会階層の分極化や反移民感情の高まりという背景の下、社会的排除論やソーシャル・ミックス政策のように、どのようなコミュニティを構想するかも重要な課題となりうる。日本でも、主として地域社会スケールでエスニック・コミュニティに関する研究蓄積があるものの、その空間的側面、とりわけセグリゲーションとの連関性についての議論は乏しい。セグリゲーションがコミュニティにプラス・マイナスいずれの帰結をもたらすのかは、移民・エスニック集団それ自体にとどまらず、ホスト社会との関係形成を捉える上でも議論の必要性が高い。

以上のように、エスニック・セグリゲーション研究は、人口移動・都市空間形成・政策・コミュニティといった都市研究のコアな諸トピックを通して、都市の本質を理解する試みに大いに寄与しうるものだといえる。しかし本稿の冒頭でも述べたように、日本では断片的な理論の紹介にとどまり、目立った実証研究の進展はみられなかった。今後、国外の諸都市との比較から日本の都市の特性を理解する上でも、エスニック・セグリゲーションの分析・考察が進むことが期待される。特に日本に関しては、国際人口移動の点で、欧米とはかなり異なったトレンドがみられることも注目される。すなわち、第二次世界大戦前の植民地からの大規模な人口移動、冷戦期の大幅な減少と停滞、グローバリゼーション下での外国人の増加率の上昇という、長期的に見てドラスティックな変化がみられた<sup>16)</sup>。このような長期的な観点から日本の都市を捉えると、植民地主義やグローバリゼーションなど、それぞれの時代に国際人口移動と強く結びついた都市空間形成のモーメントがあることがわかる。長期的な観点からもエスニック・セグリゲーションを捉えることは、時間軸・空間軸の双方を視野に入れ、(ポスト)植民地主義とグローバリズムの接点(蘭編 2013)という、現代的な研究課題の中にエスニック・セグリゲーションを位置づけることにも寄与しうるだろう。今後、都市研究ならびに移民・エスニック集団研究の双方で、実証研究の蓄積とともに研究関心が高まることを期待したい。

## 付記

本稿は、2017年7月に京都大学大学院文学研究科に提出した学位請求論文(論文博士)の第1章を加筆・修正したものである。なお、研究の遂行にあたっては、JSPS科研費・基盤研究(C)(課題番号 16K03209)の一部を使用した。

## 注

- 1) 一集団の人口の集中・偏在について、それがみられる特定の空間的範囲は、ethnic cluster, ethnic neighbourhood, ethnic quarter, ethnic concentrationなど様々な用語で表記され、それぞれに着目している側面にも微妙な差異がある。本稿では、ひとまずこうした区別を措いて、国勢調査小地域統計のようなスケールで顕在化するエスニック人口の集中を集住地区と呼ぶこととした。
- 2) Fujita and Hill (2012) による、東京のセグリゲーションに関する事例研究などもあるが、所得階層に関するものでありエスニック集団は対象とされていない。管見の限り、日本を事例とするエスニック・セグリゲーションの実証研究は、欧米でも極めて限られている。
- 3) Roseman et al. (1996) も指摘するように、都市におけるセグリゲーションや集住地区の諸形態を理解する上では、人口移動とその歴史的展開への着目が重要である。Rosemanらは、主として①国内人口移動、②局所的な国際人口移動regional international migration、③(長距離の移動を伴う)国際人口移動、④非正規入国者・滞在者、⑤難民の5つを挙げているほか、帰還移民や季節移民の存在も見逃せないとしている。
- 4) しかし、初期のシカゴ学派社会学の主要文献の中にセグリゲーションの具体的な形成過程は必ずしも明瞭に示されているわけではない。これには、梶田(2018)も指摘するように、シカゴ学派における空間的形態の検討は都市社会の理解のための副次的な位置付けであったことも影響している。
- 5) 特に1990年代以降は、GISの普及により空間的変数を組み込んだ多数の計測指標が提案された。その動向については、Lloyd et al. eds. (2014) に詳しい。
- 6) ただし、パーク自身が空間的距離に伴う社会関係形成機会の減少、つまりは距離減衰の関数として表現されるような図式を想定したかは議論の余地がある。徳田(2002)は、パークによる社会的距離概念の現実への適用が、コミュニティスケールにおける社会関係のあり様であったことを指摘している。つまり、パークらの主眼は、近接して居住しているながらも社会関係形成を忌避するような態度や、それが接触によって変容していく側面に置かれていた。
- 7) もちろん、単に消費者余剰の再投資やそれを下支えるる機構の存在だけでなく、郊外の住宅地は中間所得層に対する有効需要創出という機能を持っている。この点でも、郊外空間の建造環境は資本主義の「創造物」だとみなされ

る。また、こうした建造環境に対する投資には、資本の第二次循環、つまり景気変動の影響の緩和・吸収という側面があることも重要である。

- 8) ハーヴェイ自身、『都市と社会的不平等』の中で、「われわれの目的は[アフリカ系の集住地区である]ゲットーをなくすことである」(ハーヴェイ 1980: 179) と言い切っている。
- 9) 1963年8月28日にワシントンD.C.で行われた'I have a dream'と題される著名な演説。
- 10) ジェントリフィケーションをめぐることは、その空間的含意からすればエスニック・セグリゲーションの新たな展開につながる可能性を有していると思われるが、現在のところ明確に双方を視野に入れた研究は必ずしも活発とはいえない。とはいえ、ジェントリフィケーション研究でも所得階層を含むセグリゲーションへの言及は頻繁にあり、エスニシティに関わるものを抽出し整理することは欠かせない。紙幅の関係もあり、この現代的な特徴の検討は別稿に譲りたい。
- 11) 同化という用語や捉え方に関しては、マイノリティに抑圧的な文化・社会制度の存在を不可視化し、ホスト社会の現状を同化すべき対象として無意識的に想定しているという批判が向けられてきた。しかし、空間的同化論やその基盤となったシカゴ学派社会学において、必ずしもそのような認識は持たれておらず、この用語は文化や社会経済的地位の変容の一側面を指し示したにすぎない(Alba and Nee 1997)。その意味では、同化と、政策や社会的認識としての同化主義とは区別して捉えるべきである。
- 12) 白人の多い地区にアフリカ系住民の流入が増え始め、その割合がある一定割合以上の水準になると、資産価値の下落等への懸念から地区外への白人の転出が急速に進む過程を指す。
- 13) エスニック経済とは、一般に、個人事業主の多さと、ここで就業する同一エスニック集団の割合の大きさにより、ホスト社会から峻別されるエスニック集団に特有の経済を指す(Kaplan and Li 2006)。
- 14) この背景には、個人と地域の変数の影響を別個に評価しようとする統計的手法、とりわけマルチレベル分析の普及も影響している。ただし、近隣効果に関する因果関係の方向を特定することは容易ではない。というのは、たとえばセグリゲーションが社会関係の減少を引き起こすという仮定に対し、社会関係の乏しい者ほど集住する傾向が強くなるという、自己バイアスself-selection biasの問題が存在しうるのである(Vanhoutte and Hooghe 2012)。
- 15) 社会的結束の実現は、こうしたエスニシティ横断的な関係形成が集団間の軋轢低減にポジティブな役割を果たすことが期待されている。ただし、共有される価値観が、どのスケールに基づくものかという点には注意を要する。特に社会統合政策など、国家スケールでの社会的結束に主眼がある場合、ホスト社会の価値観を基盤にした結束、換言すれば同化主義的な色彩を帯びることも往々にしてある(安達 2009)。

- 16) 1910年時点では、外地人(朝鮮・台湾など植民地出身者)と外国籍人口を併せても、その数は2万人に満たなかった。終戦前には朝鮮人数は220万人前後まで増加し、終戦後、1950年にはその数は約60万人にまで急減する。そして、1980年前後まで大きな変動はなく推移した後、1990年代以降になると外国籍人口が増加の一途をたどり、2015年には約220万人と、数的には終戦前と同様の水準に至った。

## 文献

- 安達智史 2009. ポスト多文化主義における社会統合について—戦後イギリスにおける政策の変遷との関わりをなかで. *社会学評論* 60(3): 433-448.
- 蘭 信三編 2013. 『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点—』勉誠出版.
- ウィルソン, W. J. (青木秀男監訳) 1999. 『アメリカのアンダークラス—本当に不利な立場に置かれた人々—』明石書店.
- 梶田 真 2018. 第二次世界大戦期周辺に提起されたアメリカ合衆国の都市内部構造モデルとその背景. *地理学評論* 91(1): 79-96.
- カステル, M. (石川敦志監訳) 1997. 『都市とグラスルーツ—都市社会運動の比較文化理論—』法政大学出版局.
- サッセン, S. (森田桐郎訳) 1992. 『労働と資本の国際移動—世界都市と移民労働者—』岩波書店.
- 杉浦 直 2011. 『エスニック地理学』学術出版会.
- スコット, A. (水岡不二雄監訳) 1996. 『メトロポリス—分業から都市形態へ—』古今書院.
- 徳田 剛 2002. 「社会的距離」概念の射程—ジンメル, パーク, ボーガダスの比較から—. *ソシオロジ* 46(3): 3-18.
- ノックス, P.・ピンチ, S. (川口太郎・神谷浩夫・中澤高志訳) 2005. 『改訂新版 都市社会地理学』古今書院.
- ハーヴェイ, D. (竹内啓一・松本正美訳) 1980. 『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ.
- ハーヴェイ, D. (水岡不二雄訳) 1991. 『都市の資本論—都市空間形成の歴史と理論—』青木書店.
- バーゼス, E. W. (大道安次郎・倉田和四生訳) 1972. 都市の発展—調査計画序論. パーク, R. E.・バージェス, E. W.・マッケンジー, R. D. (大道安次郎・倉田和四生訳) 『都市—人間生態学とコミュニティ論』49-64. 鹿島出版会.
- ポルテス, A.・ルンバウト, R. (村井忠政ほか訳) 2014. 『現代アメリカ第二世代の研究—移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」—』明石書店.
- マッケンジー, R. D. (大道安次郎・倉田和四生訳) 1972. ヒューマン・コミュニティ研究への生態学的接近. パーク, R. E.・バージェス, E. W.・マッケンジー, R. D. (大道安次郎・倉田和四生訳) 『都市—人間生態学とコミュニティ論』65-80. 鹿島出版会.
- 松本 康 1995. 現代都市の変容とコミュニティ・ネットワーク. 松本 康編『増殖するネットワーク』1-90. 勁草書房.
- 松本 康 2011. 解題. 松本 康編『都市社会学セレクション(特近代アーバニズム)』199-229. 日本評論社.
- 森 千香子 2016. 『排除と抵抗の郊外—フランス<移民>集住地域の形成と変容—』東京大学出版会.
- 森川 洋 1975. 都市社会地理研究の進展—社会地区分析から因子生態研究へ—. *人文地理* 27(6): 638-666.
- Alba, R. and Nee, V. 1997. Rethinking assimilation theory for a new era of immigration. *International Migration Review* 31(4): 826-874.
- Bolt, G., Phillips, D. and van Kempen, R. 2010. Housing policy, (de)segregation and social mixing: An international perspective. *Housing Studies* 25(2): 129-135.
- Briggs, X. 2003. Bridging networks, social capital, and racial segregation in America. John F. Kennedy School of Government Working Paper Series, number 02-011.
- Brown, L. A. and Chung, S. Y. 2006. Spatial segregation, segregation indices and the geographical perspective. *Population, Space and Place* 12(2): 125-143.
- Ellis, M., Wright, R. and Parks, V. 2004. Work together, live apart? Geographies of racial and ethnic segregation at home and at work. *Annals of the Association of American Geographers* 94(3): 620-637.
- Fortuijn, J. D., Musterd, S. and Ostendorf, W. 1998. International migration and ethnic segregation: Impacts on urban areas? introduction. *Urban Studies* 35(3): 367-370.
- Fujita, K. and Hill, R. C. 2012. Residential income inequality in Tokyo and why it does not translate into class-based segregation. In *Residential segregation in comparative perspective: making sense of contextual diversity*, eds. T. Maloutas and K. Fujita, 37-68. Burlington: Ashgate.
- Fukumoto, T. 2013. The persistence of the residential concentration of Koreans in Osaka from 1950 to 1980: Its relation to land transfers and home-work relationships. *Japanese Journal of Human Geography* 65(6): 15-33.
- Gottdiener, M. and Budd, L. 2005. *Key concepts in urban studies*. London: Sage Publication.
- Harris, R. 1984. Residential segregation and class formation in the capitalist city: A review and directions for research. *Progress in Human Geography* 8(1):26-49.
- Jackson, P. 2000. Segregation. In *The dictionary of human geography, 4th edition*. eds. R. J. Johnston, D. Gregory, G. Pratt and M. Watts, 731. Oxford, Blackwell.
- Johnston, R., Forrest, J. and Poulsen, M. 2002. Are there ethnic enclaves/ghettos in English cities? *Urban Studies* 39(4): 591-618.
- Kaplan, D. H. 1998. The spatial structure of urban ethnic economies. *Urban Geography* 19(6): 489-501.
- Kaplan, D. H. and Holloway, S. R. 1998. *Segregation in cities*. Washington DC: Association of American Geographers.
- Kaplan, D. and Li, W. 2006. Introduction: the places of ethnic economies. In *Landscapes of ethnic economy*, eds. D. Kaplan and W. Li, 1-14. Lanham: Rowman & Littlefield.
- Li, W. 1998. Anatomy of new ethnic settlement: the Chinese Ethnoburb in Los Angeles. *Urban Studies* 35(3): 479-501.

- Li, W. 2009. *Ethnoburb: the new ethnic community in urban America*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Light, I. 2006. *Deflecting immigration: Networks, markets, and regulation in Los Angeles*. New York: Russell Sage Foundation.
- Light, I. and Gold, S. J. 2000. *Ethnic economies*. Howard House: Emerald Group Publishing Limited.
- Lloyd, C. D., Shuttleworth, I and Wong, D. W. eds. 2014. *Socio-spatial segregation: concepts, processes and outcomes*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Maloutas, T. 2012. Introduction: Residential segregation in context. In *Residential segregation in comparative perspective: making sense of contextual diversity*, eds. T. Maloutas and K. Fujita, 1-36. Burlington: Ashgate.
- Massey, D. 1985. Ethnic residential segregation: A theoretical synthesis and empirical review. *Sociology and Sociological Research* 69(3): 315-350.
- Massey, D. and Denton, N. 1985. Spatial assimilation as a socio-economic outcome. *American Sociological Review* 50(2): 94-106.
- Massey, D. and Denton, N. 1993. *American apartheid: segregation and the making of the underclass*. Cambridge: Harvard University Press.
- Mollenkopf, J. H. and Castells, M. eds. 1991. *Dual city: restructuring New York*. New York: Russel Sage Foundation.
- Musterd, S. 2005. Social and ethnic segregation in Europe: levels, causes, and effects. *Journal of Urban Affairs Review* 27(3): 331-348.
- Musterd, S. and Ostendorf, W. 1998. Segregation, polarisation and social exclusion in metropolitan areas. In *Urban segregation and the welfare state: inequality and exclusion in western cities*, eds. S. Musterd and W. Ostendorf, 1-14. London: Routledge.
- Ostenforf, W., Musterd, S. and de Vos S. 2001. Social mix and the neighbourhood effect: Policy ambitions and empirical evidence. *Housing Studies* 16(3): 371-380.
- Ozuekren, A. S. and van Kempen, R. 2002. Housing careers of minority ethnic groups: Experiences, explanations and prospects. *Housing Studies* 17(3): 365-379.
- Park, R. E. 1926. The concept of position in sociology. *Publications of the American Sociological Society* 20: 1-14.
- Peach, C. 1996. Does Britain have ghettos? *Transactions of the Institute of British Geographer* 21(1): 216-235.
- Portes, A. 1995. Economic sociology and the sociology of immigration: a conceptual overview. In *The economic sociology of immigration: essays on networks, ethnicity, and entrepreneurship*, ed. A. Portes, 1-41. New York: Russell Sage Foundation.
- Portes, A. and Manning, R. 2008. The immigrant enclave: theory and empirical examples. In *Social stratification: class, race and gender in sociological perspectives 3rd edition*, ed. D. Grusky, 47-68. Boulder: Westview Press.
- Portes, A. and Vickstrom, E. 2011. Diversity, social capital, and cohesion. *Annual Review of Sociology* 37: 461-479.
- Poulsen, M., Johnston, R. and Forrest, J. 2001. Intraurban ethnic enclaves: Introducing a knowledge-based classification method. *Environment and Planning A* 33(11): 2071-2082.
- Roseman, C., Laux, H. and Thieme, G. 1996. Introduction: Modern EthniCities. In *EthniCity: Geographic perspectives on ethnic change in modern cities*, eds. C. Roseman, H. Laux and G. Thieme, xvii-xxviii. Lanham: Lawman & Littlefield.
- Schleuder, Y. 1989. Labor segmentation, ethnic division of labor, and residential segregation in American cities in the early twentieth century. *Professional Geographer* 41(2): 131-143.
- Sturgis, P., Brunton-Smith, I., Kuha, J. and Jackson, J. 2013. Ethnic diversity, segregation and the social cohesion of neighbourhoods in London. *Ethnic and Racial Studies* 37(8): 1286-1309.
- Tammaru, T., Stromgren, M., van Ham, M. and Danzer A. M. 2016. Relations between residential and workplace segregation among newly arrived immigrant men and women. *Cities* 59: 131-138.
- van der Wusten, H. and Musterd, S. 1998. Welfare state effects on inequality and segregation: concluding remarks. In *Urban segregation and the welfare state: inequality and exclusion in western cities*, eds. S. Musterd and W. Ostendorf, 238-247. Oxfordshire: Routledge.
- van Ham, M. and Tammaru, T. 2016. New perspectives on ethnic segregation over time and space: A domains approach. *Urban Geography* 37(7): 953-962.
- van Kempen, R. and Ozuekren A. S. 1998. Ethnic segregation in cities: New forms and explanations in a dynamic world. *Urban Studies* 35(10):1631-1656.
- Vanhoutte, B. and Hooghe, M. 2012. Do diverse geographical contexts lead to diverse friendship networks? A multilevel analysis of Belgian survey data. *International Journal of Intercultural Relations* 36(3): 343-352.
- Waldinger, R., McEvoy, D. and Aldrich, H. 1990. Spatial dimensions of opportunity structures. In *Ethnic entrepreneurs: immigrant business in industrial societies*, eds. R. Waldinger, H. Aldrich and R. Ward, 106-130. Newbury Park: Sage Publications.
- Wang, Q. 2010. How does geography matter in the ethnic labor market segmentation process? A case study of Chinese immigrants in the San Francisco CMSA. *Annals of the Association of American Geographers* 100(1): 182-201.
- Zelinsky, W. and Lee, B. A. 1998. Hetrolocalism: An alternative model of the sociospatial behaviour of immigrant ethnic communities. *International Journal of Population Geography* 4(4): 281-298.
- Zhou, M. 1997. Segmented assimilation: issues, controversies, and recent research on the new second generation. *International Migration Review* 31(4): 975-1008.
- Zhou, Y. 1996. Inter-firm linkages, ethnic networks, and territorial agglomeration: Chinese computer firms in Los Angeles. *Papers in Regional Science* 75(3): 265-291.